（城西人文研究第21巻第1号）

【研究ノート】

嘉永版『俳諧一茶発句集』全注解（五）

黄色瑞華

凡例

一　本稿は、嘉永版『俳諧一茶発句集』（所収句八二二、他に俳諧歌一八）の全注解である。

一　一行めに『一茶発句集』所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に（　）に入れて注した。

一　二行め以下に㊀として、初出及び他書に所収の有無を書名によって記した。

一　句形等に嘉永版『一茶発句集』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。

一　語注は、簡略を旨とし、必要最小限にとどめた。

一　各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。

一　注釈史上、看過しがたい諸注は、▼以下に記した。ただし、その著者名及び書名は、初出においてのみフルネームを記し、以下は「勝峯『名句評釈』」のように略記した。詳しくは稿末の「参考文献」を参照されたい。

一茶発句集

夏の部（承前）

蚊柱の外にのうなき榎かな

㊐　七番日記（文化9・5）・稿本発句題叢・希杖本句集

▽　発句鈔追加、中七「外は用なき」。

解　うっそうと繁った榎の下に蚊柱が立っている。樹下に蚊柱が立つ、それ以外に能のない榎だよ、の意。

蚊いぶしもなぐさみになる独かな

㊐　七番日記（文化10・5）・志多良・句稿消息・稿本発句題叢・希杖本句集

▽　発句鈔追加、中七「なぐさめになる」。

解　一人いる静かな夕べ、ゆるやかに立ち昇る蚊いぶしの煙も、心の慰みになることだ、の意。

我宿の後れ松魚も月夜かな

㊐　稿本発句題叢・希杖本句集

▽　文化句帳（文化5・3）、上五「片里は」。

解　我が家に、やっととどいた「後れ鰹」、清涼の月下でそれを口にする、の意。

神国は天から薬ふりにけり

㊐　文政版発句集

▽　文政句帳（文政5・4）、上五「神国」（かみのくに）。

注　「薬ふりにけり」の、「薬ふる」は陰暦五月五日（薬日（くすりび））に降る雨。この日、薬玉を掛けたからとも、薬猟をしたからともいう。

解　さすが神国日本、五月五日の薬日には薬雨が降ってきた、の意。

▼　勝峯『名句評釈』に、「この句は即ち五月五日に雨が降ったことを言っただけのもので、これを例のお国自慢に、神国は……と詠んだので内容は極めて空疎なものだが、そこへ国家意識を加へた為に『何か有ったさうな』ことになったのである」。

昼の蚊の来るや手をかへ品をかへ

㊐　文政版発句集

▽　八番日記（文政4・5）、中七「さすや手をかへ」。

解　何としつこい昼の蚊だ。追い払っても追い払ってもつきまとう、の意。

我宿は口で吹ても出る蚊かな

㊐　七番日記（文化7・8）・希杖本句集・文政版発句集

解　このあばら家では、ふっと息をはいただけでも、たちまち蚊がむらがり出る仕末だ、の意。

隙人や蚊が出た〳〵とふれ歩行

㊐　文政句帳（文政5・5）・文政版発句集

解　今年もまた蚊が出た出たと言ってまわる男。

▼川島『新釈』に、「『よう八さん。ゆうべは蚊が出たね。』と云つた調子で、いかにも事件らしく次から次へと触れ歩いて居る。『フン隙人が……』と鼻の先で小馬鹿にして居るやうな作者の嘲笑が感ぜられる。然し、僅のことを珍しがつてそわ〳〵して居る江戸ッ子型の人物や、当時の世間相も彷彿として面白い。そして、この人物はやはり前の句（蚊がちらりほらりこれから老が世ぞ）に見る心持と同じやうに、蚊に対して一種の懐しみを感じて居るのである」。黒沢『研究』に、「ひまな人は蚊が出た〳〵と触れ歩いてゐるといふのです。世には斯うした人間が沢山あります、俳諧を手遊びとしている隠居人などはその一人です。一茶はさうした隙人を罵倒し去つて痛快を極めてゐるのであります」。

昼の蚊やだまりこくつて後ろから

㊐　文政句帳（文政6・3、7・5＝重出）・糖塚集・文政版発句集

解　昼の蚊は音もなくやって来た。しかもこの蚊は背後からやって来たのだから、気付いた時にはもうさされてしまっていた、の意。

蚊柱の穴から見ゆる都かな

㊐　七番日記（文化11・4）・句稿消息・文政版発句集

解　蚊柱の向うに、せつなくもなつかしい江戸の思い出を追う、の意。

▼川島『新解』に、「ごろりと寝そべつて、軒の蚊柱を眺めながら、人間世界を小馬鹿にした気持でニタリ〳〵とやつて居るやうな、作者の皮肉な興がりが面白く感ぜられる。（中略）この句は、季吟の『地主（ぢしゅ）からは木の間の花の都かな』を母体として居ると思はれる。地主は地主権現を指して居る。古句をもぢつてあると見る時に、一層製作動機の剽軽な気分が確かめられる」。勝峯『名句評釈』に、「一茶は縁端に腕枕でもしてゐる。軒先でブン〳〵わめき立てゝ蚊柱を作つてゐる。一茶の眼は、その蚊柱に注ぎその視線を更に前方に延した方向に都の空が有る。（中略）多少の皮肉も交へて居ようが、要するに一種の座興式に軽く、あゝあの蚊柱の穴から都が見えるぞ〳〵と言つた位の軽い意味のものであらう」。

年寄と見てや鳴蚊も耳のそば

㊐　文政版発句集

▽　八番日記（文政2・4）、中七「見るや鳴蚊も」。おらが春、中七「見るや鳴蚊の」。

解　年寄りで耳が遠いと見くびったのか、蚊までが耳のそばへ来て鳴いている、の意。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「聾のやうに聞えないのでないが、老人は耳が遠い。せつかくの声を聞き逃がす。七番日記の『としよりと見てや大声に時鳥』は親切なほとゝぎすだ。それ故耳果報だ。（中略）遠くの方で今刺しに行くぞと鳴いても聞えまい。そこで耳朶の附け根にきて、それ刺しますぞ。と予報的に先以て囁いて――鳴いてくれるのである」。川島『おらが春新解』に、「耳のはた近くブーンと鳴りを立てて来た蚊を、年よりと見て（耳が遠いから）か、と面ふくらませているところに、巧まない童心がある」。

芝浦やはつ鰹から夜のあける

㊐　文政版発句集

▽　文政句帳（文政6・3、4＝重出）、中七以下「初鰹より夜が明る」。

注　「芝浦」は、東京港区の海岸。

解　芝浦の朝は、初鰹を揚げる活気に満ちた漁夫たちの声とともに明ける、の意。

▼　勝峯『名句評釈』に、「鰹漁はこれで見ると夜中から暁にかけて行はれるものと見える。大漁だ〳〵と盛んな囃声と共に舟は陸を指して戻つて来る。陸には之を待ち迎へる家の者たちで賑つてゐる。夜は白々と明け放れて、やがて爛々たる大日輪が、ぱつと波上に赤い線を投げて、大漁を祝福するかのやうである。群集からは歓声が思はず一斉に揚る」。

鹿の親笹吹く風に戻りけり

㊐　おらが春・文政版発句集

▽　真蹟（一茶・関之両吟歌仙。「享和元年六月十八日の古反古よりひろひ出しぬ。一茶」の追記あり。この歌仙『茶翁聯句集』にも）、前書「鹿の子の題をとりて」。中七「草吹く風に」。稿本発句題叢・希杖本句集、中七「篠吹く風に」。御桜、前書「かのこといふ題」。上五・中七「親鹿ハ草吹風に」。

注　「笹吹」、「細吹く」に掛ける。

解　鹿の親はわが子の身の上を安じて、かすかに笹の葉が動く程度の風でも、子鹿のもとへ立ち戻ってきた、の意。おらが春に、「所有畜類是レ世々ノ親族ナリとなん。親をしたひ、子を慈む情何ぞへだてのあるべきや」（13話）。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「自然に棲む鹿の敵は狼だ。山犬だ。敵に嗅ぎ出されない安全な場所で、乳を吸ひ飽きて眠るその仔を気遣ひながら、戸締りはする筈もないが、出入り口を警戒して、飼を求めに親鹿は出て行く。（中略）がさごそ葉揺れがして、不気味な風が佇む脛にからまり吹く。うしろさがりに前を見張りつゝ、ぐるりと廻って、もとの林へ駈け戻る。仔鹿の安否は、ちよっとした『笹吹く風に』も親鹿の神経を尖らせるのである」。川島『おらが春新解』に、「子を残して出て来た鹿が、さわさわと笹を渡る風に不安を感じて戻っていく、というので、前出『人声に』（注、人声に子を引かくす女鹿かな）と同じく、子ゆえに敏感になっている雌鹿である」。

五月雨の竹にはさまる在所かな

㊐　板本発句題叢（文政3）・文政版発句集

▽　享和句帳（享和3・5）、中七「竹に隠るゝ」。

解　五月雨の季節、雨に濡れた竹の枝は重くたれさがっている。そんな竹に囲まれるようにしてある在所だよ、の意。「在所」は作者自身の在所とこだわることはあるまい。

昼の蚊を後にかくす仏かな

㊐　嘉永版発句集初出

解　顔の近くにブーンと蚊の音がした。それをはらいのけると、藪の石地蔵は自身のうしろにかばうようにさっと隠してしま

われた。

▼　黒沢『研究』に、「本尊の後ろは小暗くて昼の蚊の何よりのかくれ所である。わびしき本堂の趣と、仏に心ありて蚊をかくすと云ったのが面白い。（中略）仏がかくしたと云ったのは所謂擬人法の最上なるものです」。

鶯よ老をうつるな草の家

㊐　板本発句題叢

▽　稿本発句題叢・希杖本句集、上五「鶯も」。座五「おれが家」。発句鈔追加、上五「黄鳥も」。座五「藪の家」。

解　鶯がこの草の家に飛来して、さかんに囀っている。主人である私の老をうつるなよ。いつまでも、その若い声を持ち続けてほしい、の意。

蜘の子はみなちり〴〵の身すぎ哉

㊐　文政句帳（文政5・4）・文政版発句集

解　蜘蛛の子がそれぞれに別れて散っていく。それが天から与えられた境遇なのだ、の意。

▼　勝峯『名句評釈』に、「蜘の子を散らすやう、とは俗間の譬喩である。この俗諺から出て、ぱっと四方に散った蜘がみなそれ〴〵の営に従ってゐることを言ったもので、『蜘の子を散らす』の俗言から出来たといふだけで、外に何等の内容はない。但しこれをあらゆる動物の世界、植物の世界、あらゆる人間の世界へ持って来て見るとこの句の心は生きて来る。（中略）思って見ればしみ〴〵と淋しいやうな、果敢ない様な気分にも誘はれるのである」。

かはほりやさらば汝と両国へ

㊐　七番日記（文化11・4）・句稿消息・文政版発句集

注　「かはほり」、蝙蝠（こうもり）。

解　蝙蝠が目の前をよぎった。お前とともに、涼風にさそわれて、両国界隈にくり出したこともあったなあ、の意。

▼　川島『新釈』に、「一通り両国橋の繁栄を考慮に置けば、この句は訳なく解せる。恰度蝙蝠の出かける頃の、暮方のそそられ気分である。然し、この句は鑑賞者が一つの気分を作つて迎へ入れて呉れないかぎり、それ自身価値のないもので、作者はたゞ気分の暗示を与へて居るに過ぎない。斯ういう句は、得て概念のお化となり易い傾きを持つて居る」。伊藤『小林一茶集』に、「蝙蝠と共に夕風にさそはれて、両国の歓楽の巷にぞめき出るのである。やもめ住まひの一茶の境涯」。中島『小林一茶集』に、「こうもりよ、お前といっしょにこれから両国のほうへでも涼みに行こうかい、というのである。当時、両国にはいろいろな興行物の小屋が並んで、歓楽街をなしていた。江戸流寓時代の追憶を詠んだものと思われる」。

まつて居る妻子もないか通し鴨

㊐　文政句帳（文政8・3、6＝重出）

注　「通し鴨」は、夏になっても移動しないでいる鴨。

解　夏になっても移動しないでいる鴨よ。お前には帰りを待っている妻子もないのか、の意。

烟して蝙蝠の世もよかりけり

㊐　文化句帳（文化3・4）・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加

注　「烟して」の「烟」は、霞・靄などを言ったものであろう。

解　霞たなびく春の日、人びとの動きは急にあわただしくなる。天井に静かにさがる蝙蝠。蝙蝠の生活もよいものだなあ、と解しておく。

あやめめせ武門かやうに静なり

㊐　真蹟・嘉永版発句集初出

▽　文化五六年句日記（文化6）、上五・中七「菖蒲ふけ浅間の烟」。
注　「あやめめせ」は、菖蒲を売り歩く者の売り声であろう。
解　端午の節句がやってくる。「あやめめせ、あやめめせ」と、菖蒲売りの声が静まりかえった武家の町に流れている、の意に解したい。

古婆々がかたにかけたり蛇の衣

㊐　文政句帳（文政8・6）
解　肌寒い秋風が立つ奥信濃である。この老婆は、蛇の抜けがらのようなぼろ着物を肩から羽織っているよ、の意。

羽蟻出る迄に目出たき柱かな

㊐　八番日記（文政2・4）
▽　希杖本句集、座五「庵哉」。
解　これはまあ、羽蟻が出るほど長持ちした柱だよ。老朽化した自家の柱であろう。

はげ天窓箍(箍)をかけろと行々子

㊐　八番日記（文政2・5）
▽　風間本・梅塵本とも、中七「箍(箍)かけろとか」。
注　「箍」（たが）は、桶のまわりにはめる竹や金属で作った輪。
解　はげ頭に箍をかけろ、箍をかけろとヨシキリが鳴いている。「ギョギョシ」と聞えるヨシキリの鳴声から竹製の箍を編む音を連想した。

罷り出たるは此藪の墓にて候

㊐　八番日記（文政2・7）・おらが春・文政版発句集

▽　梅塵本八番日記、「まかり出たるものは」。

注　「罷り出たるは」は狂言言葉。例えば『餅酒』に、「まかり出たる者は加賀の国のお百姓でござる」。

解　藪の中からのそっと出てきて、静止した蟇の姿を狂言言葉によって描写したのである。

▼　暉峻『名句の鑑賞』に、「のそりのそりと藪から這ひ出てくる蟇の風貌は、如何にもこの勿体ぶった謡曲調で適切に表現されてをります」。勝峯『評釈おらが春』に、「尻声をながく引いて、頬をとぼけてふくらませる、狂言の口上の罷り出たるは、其角の「ひきがへる」（注、鶯にまかり出たよ引蟾）が先取権を握つてゐる。此の蟇は其角のやうに鶯に誘はれて現はれたのでなく、我が一茶の前にのそり〳〵這ひ出たのである。（中略）黙りこくる顔に口上を云はせて、野人一茶の足許に平いつくばる可笑味を、間の延びた一句の言ひ廻はしに湛へてゐる。其角の叱りを受けないのは『此藪』の二字にある。等類のそしりをまぬかれるのも、その二字の提出にある」。川島『おらが春新解』に、「人並みに夕涼みの莚に近く這いだして来た蟇の面がまえは、『これは藪のもとのひきがえる何世の孫にて候』と名のり顔である。其角の句（注、鶯にまかり出たよ引蟾）の場合も同様であるが、『まかり出たる』という伝統語に三太夫めいた角張った響きがあって、それが鈍重な蟇のもっともらしい様子を彷彿させる」。

年寄の袖としらでやとらが雨

㊐　梅塵本八番日記（文政2）

▽　風間本八番日記（文政2・6）、座五「虎の雨」。

注　「とらが雨」、建久四年五月二十八日、曽我兄弟は父の仇・工藤祐経を斬った。この時、討死した兄の十郎祐成の妾・大磯の虎（遊女）は、同年六月十八日出家して信濃の善光寺へ赴いた（吾妻鑑）。大磯の虎の悲嘆の涙が雨となり、以降毎年この日に雨が降るという俗説は、近松の曽我物などにも見える。『毛吹草』の「四季之詞」に、「曽我兄弟夜討（廿八日此時のさた多し）」として「虎が泪の雨」をあげる。

解　五月二十八日、こんな老人と知ってか、袖に虎の雨が降りかかる、の意。

とらが雨などかろんじてぬれにけり

㊐　八番日記（文政2・6）・おらが春・希杖本句集・文政版発句集

▽　おらが春、前書「五月廿八日」。

解　天をおおった雨雲に、今日は五月二十八日虎が雨の日と、雨具の用意もせずに外出して、すっかり濡れてしまった、の意。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「雨といっても、呪ひほどに零れるばかり、本降りにはならない。虎が雨とはさうしたものと呑み込んで、傘も持たずに出掛けたら、ひどい雨に逢って、ずぶ濡れになったと云ふのである」。川島『おらが春新解』に、「はらはらと降って来た空を見上げて、ナニ今日は五月二十八日、申訳にふる虎が雨だと、タカをくくって雨具の用意もなく出かけたところ、案外に大ぶりとなって、ずぶぬれとなったというのである」。

妙義山

五月雨や夜もかくれぬ山の穴

㊐　寛政三年紀行（4・14）・文政版発句集

▽　文政版発句集、前書「妙義」。

解　五月雨のふりしきる夜、妙義山の山腹あたりを見あげると、山に穴があいたかのように石門の姿が目に入る。

▼　丸山一彦『父の終焉日記・寛政三年紀行』に、「五月雨の降りこめた夜空を仰ぐと、山腹のあたり、夜目にもしるく石門の不気味な姿が黒々と見える。あのあたりを這い登った昼の恐ろしさが、改めて思い出されることだ」。

粒々皆辛苦

もたいなや昼寝してきく田植唄

㊐ 寛政紀行（書込）・一白あて書簡（寛政10・4・19付）・文政九・十句帳写（文政10）・希杖本句集・文政版発句集

▽ 文政九・十句帳写、「耕ずして喰ひ、織ずして着る体たらく、今まで罰のあたらぬもふしぎ也」と前書して、「花の影（陰）寝まじ未来が恐しき」「真黒な藪と見へ（え）しが寒念仏」「勿体なや昼寝して聞田植唄」。

注 「粒々皆辛苦」、李紳「憫農詩」に「鋤レ禾日当レ午、汗滴禾下土、誰知盤中飧、粒々皆辛苦」。米の一粒一粒は農民の辛苦による、の意。文政版発句集、「粒々皆心苦」と誤る。

解 ああ、何と罰あたりなことよ。昼寝して田植歌を聞くとは。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「初期の作ではあるが、晩年の心境も正に此の通りであつたのである。（中略）句意は解するまでもない。今日ならば文芸で飯を食ふことに誰一人異議を唱へるものもないが、文芸至上主義などゝいふことを知らなかつた当時の一茶としてはかうした境界に在ることを時々自責してゐる。――自責しつゝ之に終始したことは偉い――これもその一面の一茶を如実に語るものである」。中島『一茶集』に、「奥信濃の百姓の子に生まれた一茶は、順当に育ったならば、田畑を耕し、村人といっしょに田植もしなければならなかったはずである。（中略）一茶の体内には父祖伝来の農民の血が流れている。額に汗して働く農民の田植歌をきけば、おもしろおかしい田舎風の俳諧を囀るよりほかに能のない、穀つぶしも同然の、その日暮しを、恥ずかしく思わずにはいられないのである」。

信濃路や上の上にも田うゑ唄

㊐ 板本発句題叢

▽ 中七以下「山の上にも田植笠」の誤りであろう。八番日記（文政4・8）・稿本発句題叢・希杖本句集、中七以下「山の上にも田植笠」。

解 あれ、あんな高い所にも早乙女の姿が見えるよ。この信濃路では。

身一つすぐすとて女やもめの哀は

おのが里仕舞てどこへ田うゑ笠

㊐ 八番日記（文政2・2、5＝重出）・おらが春・発句鈔追加

▽ おらが春、前書「身一ツすぐす迚山家のやもめの哀さハ」。希杖本句集、前書「さなふもせざるやもめの哀さは」。上五「おのが村」。

解　田植の季節、近隣に雇われて田植の賃仕事に出ていた未亡人は、菅笠を背にいそいそと出かけて行く。今度はどこへ行くのだろう、の意。哀れな存在、弱者に対する一茶の目はこまやかである。

▼ 勝峯『評釈おらが春』に、「村中の田はみんな植附けが済んだ。惣出で植ゑても、手廻らない家に雇はれて、一人口の後家を立てゝ、食ふに困ることもなかつたやうだ。これから何処へ、稼ぎ口をさがしに行くのだ。亭主をなくして了つて、再縁もしないで、頑なにあゝしてやもめ暮らしの、みじめさを悔いもしないで、位牌を守るこゝろ掛けこそ感心だが、はたから見れば気の毒な境涯である。一茶の同情はその笠の一字に注がれてゐる」。川島『おらが春新解』に、「自分の村里の田植を終ってから、さて今度はどこへいくのであろうか。山家のこととて適当な産業もないままに、他所の田植にやとわれていく寡婦の身の上をあわれに思いやったのである。『田植笠』に季感と女の姿を現したところが老練である」。加藤『秀句』に、「自分の田をあまり多く持っていない寡婦などは、人の田植に雇われていって賃金を貰うのが身過ぎのわざなのだ。自分の村も田植が終ってもう雇ってくれるところもなくなったので、どこか他村へでかけるのであろう、わが村の人々の田植休みの時に田植笠を被ってでかけてゆくことよと、『山家のやもめのあはれさ』を感じとっているのである」。

住よし

唐人も見よや田植の笛太鼓

㊐　八番日記（文政2・6）・発句鈔追加・希杖本句集

注「住よし」、大阪住吉神社。その御田植（六月一四日）をさす。この神事では、早乙女役を芸妓・娼妓がつとめることを古例とした。

解　唐人も来て見よ。これが住吉神社の御田植神事だ、の意。

早乙女や箸にからまる草の花

㊐　七番日記（文化7・6）・稿本発句題叢・文政版発句集

解　田の畔でとる田植の昼食。すっかり伸びきった田の畔の野草が、早乙女が使う箸にからみつくほどだ、の意。

稽古笛田はことぐく青みけり

㊐　七番日記（文化7・6）・某あて書簡（文化7・6・7付）・発句鈔追加

▽　稿本発句題叢・希杖本句集、上五・中七「けいこ笛田がことぐく」。

解　田植も済んで、早苗が根づくころ稽古笛の音が聞こえてくる。野休みにおける農村青年の楽しみであろう。

寝せつけし子のせんたくや夏の月

㊐　文政句帳（文政6・5）・文政版発句集

解　やっと子を寝せつけた後、その子が昼の間によごした衣類の洗濯をする、の意。座五「夏の月」に、洗濯をする母親の心情がよく表現されている。

夏山やひとりきげんの女郎花

㊐　七番日記（文化7・6）・比止理多智

▽　七番日記、前書「廿七日会題」。

解　通る人とてない、この夏山で女郎花がすくっと伸びたその頭上に花をつけている。「ひとりきげん」にその花の様が表現されている。

なぐさみにはら(わ)を打なり夏の月

㊐　八番日記（文政2・2、5＝重出）・おらが春

▽　全集本（発句篇）、中七「腹を打なり」と誤る。

注　「わらを打」、縄をなったり、草履や草鞋などを編んだりするために、土間に埋めた伏鉢状の丸石の上で、丸太を一尺ほどに切り、さらに握りの部分を細く作った槌で、藁をたたいてやわらげる屋内の農作業。

解　暑苦しい夏の夜、軒からさし込んでくる月の明りをたよりに、汗を飛ばしながら季節はずれの農作業にあたる。それは楽な仕事ではない。一茶はそれを十分承知の上で、「なぐさみニ」と言ったのである。行きづまりつつあった封建制度は、その末端において相互監視の風を育てていた。農民にあってもそれは埒外ではなかった。屋内の農作業、その間だけは何人にも干渉・拘束されることはなく、それはまさに精神の解放の時であった。これは早起きした農民の朝飯前の時間つぶしではない。仕事を忘れることのできない篤農でもない。作者の意図は、むし暑い夏の夜の農作業、それが「なぐさみ」になるという現実の告発にあった。座五の「夏の月」には、「解放」のひととき、その心情が込められている。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「農閑期の冬は藁砧をまへに、槌のこだまを雪の山々に呼ぶ。麦刈だ、田植だ。相互労作のえいまでして、農繁期の夏は今日の疲れ、明日の励みにどの家も早寝する。老人は冬より夏が元気だ。早寝の癖が抜けて、若いものゝ健やかに高いいびきを聞きつゝ起きてゐる。霜のやうに大地の白い夏の月夜、老人の藁仕事は保健上にもよい」。川島『おらが春新解』に、「なぐさみがてらの気まかせ仕事とは言え、夏の月夜の涼みの一と時も、なを仕事を忘れぬ農民生活の実相が捕えられている」。加藤『一茶秀句』に、夏の月が出て都会ならちよっと門辺で涼んでみるという夜だ。しかし、農家では手ぶらで月見をする気になれないのである。暇があれば筵や縄、履物にする藁を打つ。月の下で藁を槌で打つことがわずかになぐさみになるのである。寸暇も手から仕事を離せない農民心理がつかみだされた、どこかかなしみのある

作と思う」。

小むしろや茶釜の中の夏の月

㊐　八番日記（文政2・5）

解　野点の景。茶釜の中にゆらぐ月影に作者の思いが重なる。

茨の花こゝをまたげと咲にけり

㊐　寛政三年紀行（4・8）・文政版発句集

注　寛政三年紀行、「（四月）八日晴。古郷へ足を向んといふに、道迄同行者有。二人は女、二人は男也。行徳より舟に乗て、中川の関といふにかゝるに、防人、怒の眼おそろしく、婦人をにらみ返さんとす。是おほやけの掟ゆるがせにせざるはことわり也。又舟人いふやう、『藪の外より、そこ〳〵のうちを通りて、かしこへ廻れ』といふ。とく教のまゝにすれば、直に関を過る事を得たり。誠に孟嘗君の舌もからず、浦の男の知恵もたのまず。げに〳〵丸木をもて方なる器洗ふがごとく、隅ミ〴〵の下闇を見逃〔す〕とは、ありがたき御代にぞありけ〔る〕」にこの句を添える。

解　野茨の花が咲いているあたり、よく見れば、ここをまたいで通れと言うように低くなったところがある、の意。

▼　丸山『父の終焉日記・寛政三年紀行』に、「野茨の花が棘をつけて行手を遮っているが、よく見ると、ここをまたげと言わんばかりに、越えやすそうな所をちゃんと用意してくれている。なかなか話せる茨の花だ。そういえば、あの船関所のやり方もそうであった。杓子定規の窮屈さの中にも、どこかに抜け道のあるところが、世の中のおもしろさというものであろう」。

短夜に竹の風くせ直りけり

㊐　文化句帳（文化5・4）・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

解　冬から春にかけて、風のために曲ってしまっていたこの竹も、夏になってまたすくっと頭をもたげるようになった、の意。

起〳〵に慾目引ぱる青田哉

㊐　八番日記（文政2・6）・おらが春・発句鈔追加

解　起きぬけに青田を一廻りして、その作柄・病虫害に気を配る篤農。それを一茶は「欲目引ぱる」と揶揄したのである。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「青田相場で投機的な取引の行はれるので見（ママ）て、青田の良否が豊凶を予想する重大性が知れやう。朝の目覚めに早くも青田へ気を配ばる。起きぬけの顔も洗はないで青田をひと廻りして来る。神経質に大きく目を張つて、喜憂の表情が日によつて違ふ。起きたばかりで此の慾心がきざす。起きたてから発作的な慾心に釣られて、険しい目の張りである。深刻な顔へ、朝風が一ト吹き青田を辷つて、その慾面を洗へとばかり、したゝか吹きかけるのである」。川島『おらが春新解』に、「毎朝目がさめると先ず青田の方へ目がいく、そこには重大な利害関係がかかっているので、なるほど欲目を引っぱる訳であるが、むしろそうした打算を超えて全生活を堵けている青田の方へ無意識に引かれる農民の気持がつかまれている」。

豆腐やが来る昼顔が咲にけり

㊐　七番日記（文化10・6）・志多良・句稿消息

解　いつものように豆腐屋が来る。そして、いつものように昼顔が咲いている、の意。

▼　加藤『秀句』に、「豆腐屋がやってくる時刻に、いつも昼顔がぽっかり咲いているのであろう。だから『豆腐屋が来る昼顔が』となるわけだ。今でも郵便配達とか、御用聞とか毎日きまってくるものと結びついた花を自分たちの生活から発見することが可能だと思う。豆腐屋の売りごえと、淡紅の昼顔とがしずかな調和を持っているところがよい。日常生活の中からの小さな発見が妙な誇張もなく光っている」。

夏の夜や二軒して見る草の花

㊐　稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

解　家混みの都会生活であろう。戸を開け放って涼をとる二軒、その間に鉢植であろうか草花がある、の意。

源氏の題にて

夕がほや男結の垣にさく

㊐　嘉永版発句集初出

注　「男結」、縄やひもなど右端を左の下にまわして返した輪に、左の端を通して結ぶ結び方。荷物や垣根などを結ぶときによく用いる。

解　きりっと男結びに結ばれた垣根に、夕顔の蔓がのびて花をつけている。前書から、「源氏」の夕顔の巻にこじつけた作であることがわかる。

日々懈怠不惜寸陰

けふの日も棒ふり虫よ翌も又

㊐　おらが春・文政版発句集

▽　風間本八番日記（文政2・夏）・中七以下「棒ふり虫と暮にけり」。梅塵本八番日記（文政2）、中七以下「子子むしと暮しけり」。

注　自筆稿本、上欄に「朱文公勧学文。勿レ謂今日不レ学而有二来日一、勿レ謂今年不レ学有二来年一、日月逝矣、歳不二我延一、嗚呼老、是誰之愆」。「棒ふり虫」、ボウフラ。蚊の幼虫。「棒にふる」に掛ける。

解　毎日なまけていて、今日もまた一日を無為に過してしまった。あすもまた、そうであろう、の意。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「毎日、惰気に制せられて、毎日、無為に過ごしてしまふ。分秒の惜しまれる一生を、あたら悔ひもなく徒食するやからである。（中略）赤裸になって曲線的に乱舞するあの虫が、棒振虫の名を恥しめてはならぬかのやうに、けふも身ぐるみ棒にして、あんな風に水の中に自分を振り廻して一日を棒に振る。明日もさうである。あさつても、やのあさつても、遂に一生をいのちぐるみ棒に振ってしまふのだ」。川島『おらが春新解』に、「棒ふり虫は汚水の中に踊りながら今日も他愛なく過してしまった。あすもそうであろう、あさつても……結局一生を棒にふってしまうのだと、訓戒めいた気持を前書にあらわしてある。もちろん開き直った訓戒ではなく、棒ふり虫を教訓の材料としているところに、逆効果的なユーモアがある」。

ひいき鵜は又もからみで浮みけり

㊐　おらが春・文政版発句集・希杖本句集

▽　八番日記（文政2・6）、座五「浮にけり」。同（2・4）、「手馴鵜の又もから身で浮きにける」。

解　鵜匠がさばく鵜の中で、特に気を引くこの鵜は、今度もまた雑魚一尾くわえずに浮んできた、の意。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「鵜匠の荒い手で柔らかく何羽も捌かれる鵜の中で、あの鵜こそ獲ものをきっと呑んで来るぞ。さう目利をして期待していた鵜が『から身』で、一尾の鮎も獲らずに潜つた水から浮び出た。（中略）鵜飼見の賭けが行はれたとすれば、今いふ後援者のひいきと見て差閊へない」。川島『おらが春新解』に、「鵜匠の手によって何羽もさばかれている鵜の中に、あれはと目をつけ期待をかけている鵜が、あいにく成績がわるく、又、今度もから身であがって来たというので、鵜飼見物の一場面としてありそうなことであるが、『ひいき鵜は』のはに、自分がひいきするとあいにくとか、意地わるくとかいう主我意識が盛りこまれていて、あくが強い」。

手枕や親子三人鵜のかせぎ

㊐　八番日記（文政2・6）

注　「手枕」、ごろりと横になった楽寝の体と見るべきであろう。
解　こんなによく稼ぐ鵜を持っていては、それにささえられて、親子三人気楽な生活ができよう、の意。

はなれ鵜が子の泣く舟に戻りけり

㊐　おらが春・文政版発句集
▽　八番日記（文政2・6）、上五・中七「放鵜の子の鳴舟に」。
解　綱をとかれ小魚を漁る鵜の中から、母鵜が一羽、稚鵜の鳴く舟に戻ってきた、の意。
▼　勝峯『評釈おらが春』に、鵜匠の捌きを遁れて群から遠く離れた鵜である。呼んでも来ない。それが子持鵜であったので、母鵜を慕つて鳴く子への愛情から、その舟を忘れないで戻つて来た。母性愛など見られない無愛想な顔はしているが、親子の絆はこの鵜にさへ絶ち難いものとなつてゐる。（中略）鵜ですら、この通りな本能的愛がある」。川島『おらが春新解』に、「これは鵜飼中の鵜ではない。はなれ鵜即ち放ち鵜で、鵜匠の舟から放されて勝手に漁ることをゆるされている鵜の自由時間である。夜ではない。舟にはまだ早瀬に堪えぬ稚鵜が乗っているのであろう。自由を楽しんでいる一群れの中から、稚鵜の鳴き声に引かれて、恐らく小魚をくわえながらツツーと舟に戻ってくる親鵜」。

賑しう鐘の鳴込鵜舟かな

㊐　稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集
▽　稿本本句題叢以下、上五「賑はしく」。
解　鐘をたたいたりするにぎやかな鵜飼もあったのだろう。

鵜のまねをうより功者な子供かな

㊐　梅塵本八番日記（文政2）

▽　おらが春、上五・中七「鵜の真似ハ鵜より上手な」。
注　諺に「鵜のまねをする烏」。
解　川遊びをする子どもたちである。
▼　勝峯『評釈おらが春』に、「一茶は水に溺れる烏を嘲って、泳ぎのうまいこどもを褒めて、誰も知ることわざを逆手で封じて快としたのである。諺から烏を除いて、こどもをその代りに使ったのが、諺の裏を行く一茶の覘ひどころである」。川島『おらが春新解』に、「これは水もぐりの上手な子供たちをほめたのであろう。（中略）俗諺の意味をはなれて、鵜の真似という言葉が、川遊びの子供らのビチビチした動勢を描き出している」。

初螢ついとそれたる手風かな

㊥　七番日記（文化15・5、12＝重出）・文政版発句集
▽　全集本、中七「さつとそれたる」と誤る。
解　手ではらい落そうとした瞬間、螢はさっと身をかわすようにしてのがれたのである。

最うひとつ川を越とよ飛螢

㊥　嘉永版発句集初出
▽　文政句帳（文政8・4）に、「又一ツ川を越せとやよぶ螢」。
解　「アッチノ水ハ苦イゾ、コッチノ水ハ甘イゾ」と誘ってみるが、なかなか近寄ってこない螢。その川をも一つ越えてこっちへ来い、の意。

ゆけ螢とく〳〵人の呼うちに

㊥　七番日記（文化11・11）・句稿消息・其翠あて書簡（某年6・1付）・文政版発句集・発句鈔追加

▽　希杖本句集、上五「初螢」。

解　行け螢よ、早く早く、向うで子供たちが呼んでいるうちに、の意。

大螢ゆらり〳〵と通りけり

㊐　八番日記（文政2・6）・おらが春

▽　八番日記、中七以下「よ(ゆ)らり〳〵と通りけり」「せかずによ(ゆ)らり〳〵哉」の両案併記。

解　大螢がひとつ、ゆっくりゆっくり行くよ、の意。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「闇を掠める大きな光りが、不敵なつら構へにも見えて来る。追つたり、摑まへたりするのが不気味のやうな存在となつてくる」。川島『おらが春新解』に、「『ゆらり〳〵』と、大幅に弧を描いていく重量感、『通りけり』の悠々迫らぬ調子、いずれも大螢の貫禄を示している」。